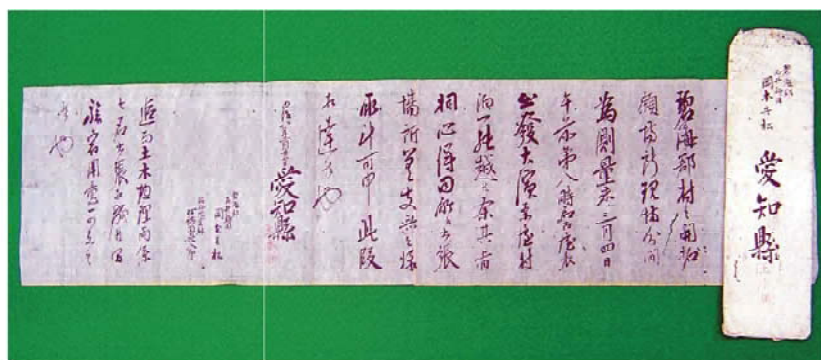


民間人の資金で明治用水を開削

おかもとひょうまつ いよだ よはちろう
—岡本兵松と伊豫田与八郎—



測量に付愛知県より岡本・伊豫田宛書状 1875年



碧海郡溜池池床開墾新田用掘割願 1878年

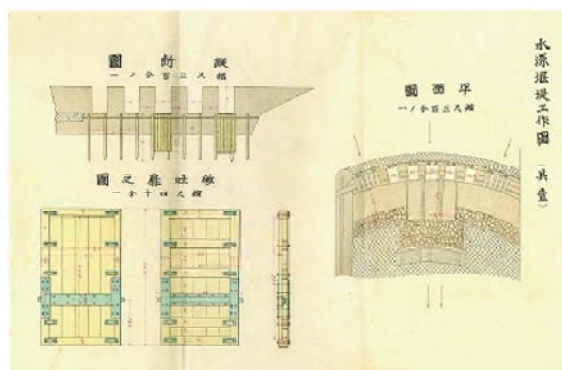
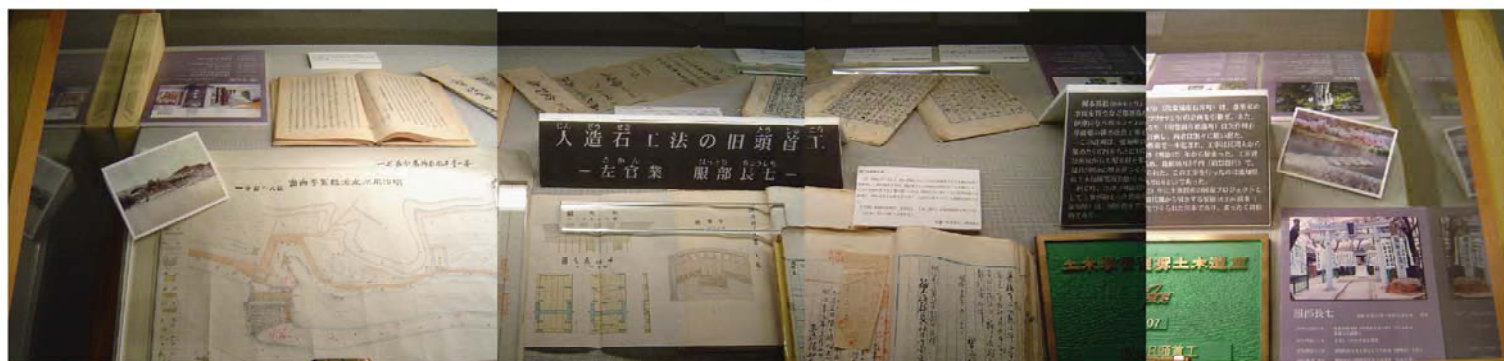
岡本兵松（おかもとひょうまつ）（現安城市石井町）は、都築家の水田を買うなど都築弥厚（つづきやこう）の計画を引継ぎ、また、伊豫田与八郎（いよだよはちろう）（現豊田市畝部町）は矢作川右岸低地の排水改良工事を計画し、両者は別々に願い出た。

この計画は、愛知県の指導で一本化され、工事は民間人から集めた6万円をもとに1879（明治12）年から始まった。工事費は新田からも配水料を集め、総額16万3千円（約23億円）で、延長280kmの用水がつけられた。この工事を行ったのは愛知県の土木技師黒川治愿（くろかわはるよし）であった。

同じ時、1879（明治12）年に上族授産の国家プロジェクトとして工事が始まった猪苗代湖から引水する安積（あさか）疏水（福島県）は、国の資金でつけられた用水であり、まったく対照的である。

じん ぞう せき とう しゅ こう 人 造 石 工 法 の 旧 頭 首 工

さ かん は っ と り ち ょ う し ち
一 左 官 業 服 部 長 七 一



旧頭首工設計図



土木学会選奨土木遺産銘板 2007年

川をせき止めて取水する施設を、農業用水では「頭首工(とうしゅこう)」と言い、一般に使われる堰(せき)と同じ役目をする。明治用水は矢作川から取水しているが、最初の取水施設は、粗朶(そだ)(切り取った木の枝)を敷いて木杭を打ち、割石と礫(れき)(岩石の破片)を積み上げた簡単なものであった。しかし、度重なる洪水で流され、取水が安定しないため、1901(明治34)年に人造(じんぞう)石の発明者服部長七(はっとりちょうしち)に工事を依頼し、堅固(けんご)な頭首工に改築した。この頭首工の完成により、取水量は増え、水田も増加し、農家は近代的な農業経営を取り入れ、大正時代に安城市は「日本デンマーク」と言われる先進的な農業地帯へと発展した。

現在の頭首工は三代目で、1958(昭和33)年に完成し、鉄筋コンクリート重力式である。